「特集・環境創造」

専門職としての造園とその教育——日米比較論

ジョット・D・カーペンター*
中 村 一 訳編**

Landscape Architecture as a Profession, and its Education
——Comparison between the United States and Japan

J. D. CARPENTER*
(translated and edited by) M. NAKAMURA**

摘要：米国の造園専門教育は、知識体系の獲得と、その背景を知得するにとどまらず、実践的・社会的場面の中での専門職としての自覚を養生する点へも力点が置かれている。その結果、造園分野の細分化と多様な教育課程および資格の確立にも実務頭域との連繫を強めた形態がみられる。造園家の資格もこの体系的な骨組みを前提としたものであり、日本の理論的部分に傾斜した現状とは異なる。その理由の一つに造園をとりまく環境の違いをあげることができ、それは自然的な違いと職種が未組織である社会的なものもある。

1. はじめに

Jot D. Carpenter 氏は、現在オハイオ州立大学造園学科の教授であり、かつてはアメリカ造園家協会 (ASLA) の会長を勤めたことがある。IFLA のアメリカ代表団員としても精力的に活動している。日本で開催されたイフラ大会にも出席したが、さらに、その年の11月に日本学術振興会の奨学金を得て、1ヶ月間、日本の造園の視察や造園教育者との交流を行っている。

カーペンター教授は、日本造園学会主催の講演会では、専門職としての造園とその教育について、熱心に話してくれた。また日本における同様の問題について、かれ自身の印象をとりまとめて学術振興会に報告している。日本の造園職とその教育についての印象記はきわめて卒直であり、傾聴に価いするものがあると思われる。とくに大学での教育に関しては、主として京都大学の造園学研究室における印象であり、耳の痛いところもすくなくない。

講演内容と学術振興会への報告の概要を紹介することによって、造園とその教育とが、日米間でどのようにちがっているかを知る一つの資料としてみたい。

2. 専門職としての米国の造園とその教育 (講演要旨)

ここで論じることが、簡単に言って、専門職を構成するものはなにかということ、次に、なぜ造園は専門職であると考えられるのかということ、さらに専門的職業と

しての造園とその教育制度との関係について、とりわけ、大学における学科課程の基準認定についての紹介である。

(1) 専門職 (profession) とは何か

専門職は5つの基本的な性格の上に成り立っている。

i) 知識の体系 (A Body of Knowledge)

ii) 倫理綱領 (Ethical Codes)

iii) 認知された社会的地位

(Recognized Social Status)

iv) 専門職的な下位文化 (Professional Sub-culture)

v) 社会の支持 (Community Sanction)

i) 知識の体系は、他の分野の者が容易に所有することができないもので、初心者への知識の伝達は大学レベルでの制度化された専門職業教育によってなされる。専門職の活動は、この知識の体系に基づく、あるいは、そこから導き出されるところの、技能、職人的技量、業務の遂行のなかにみられる。専門職の業務は、測ることのできる水準をもった職人的技量から生じてきたものであり、また、その水準を必要とするのである。この知識は教えるものであり、学べるものであり、社会的に有用なものである。

ii) 倫理綱領は、ふたつの前提の上に立っている。第1に、その専門職は社会に対して害を与えてはならないこと、第2に、その専門職は自己管理的でなければならないことである。社会は、専門職が特殊化された教育に

* オハイオ州立大学

** 京都大学

対して大きな自己管理能力を行使するのを許容し、また期待している。一人ひとりの専門職は、かれらの行為に対して個人的責任を取らねばならない。

iii) 認知された社会的地位は、専門職の業務を通じて、適当な収入があることで保証される。専門職は、終身的な職業であり、他の職業のための中間的な修業ではない。

iv) 専門職的な下位文化とは、素人や非専門的判断を除外する専門職の組織あるいは団体のことである。このような組織は、構成員の教育と社会化のために存在する。

v) 社会の支持は、行政庁による何らかの免許の形をとるもので、業務上の何らかの独占形態として存在する。

(2) 造園はなぜ専門職であるか

米国の造園 (Landscape Architecture) が専門職であると考えられる理由は、上述の5つの性格について検証してみることによって与えられる。

i) 知識の体系は、未だ浅薄で、はっきりとしないが、存在しているといえる。造園に関する書物は増加していきつある。この知識の体系を伝達するのは大学レベルの専門職教育であるが、これについては後述のように、アメリカ造園家協会によるきびしい学科課程の認定が行われている。

ii) 倫理綱領は既に設けられている。また、専門職教育の水準や要求は自律的に決められており、また免許制にかかわる試験の内容も自律的に決められている。

iii) 社会的地位は認知されている。初任給は建築家と同等ないし上廻るようになり、経験を積むに従って収入は上昇している。その上昇率は他の技術者よりも大きいことがある。造園の修士 (MLA) はターミナル・ディグリー (terminal degree: 専門職の教育としては最終的学位の意) とみなされるようになり、造園の実践は、それ自体が目的であり、他の仕事のための準備的なものではなくっている。

iv) 専門職の下位文化は次の組織が発展している。

ASLA (1899年設立)	アメリカ造園家協会
CLARB (1960)	造園家登録審査協議会
ASLAF (1966)	ASLA財団
LAF (1972に上が改名)	造園財団
NCILA (1920)	全国造園教育者協議会
CELA (上の改名)	造園教育協議会
IFLA (1948)	イフラ

v) 社会の支持は、39州における造園家の免許制度、連邦政府職員の分類に造園が入ったこと、多くの州や自治体でも公務員の分類に造園が入るようになったこと、いくつかの裁判所の判決で造園が独立した明確な専門職

と認められてきたこと、などから明白に伺える。

以上のように、米国では造園が専門職となっているといえる。この専門職としての造園を、一方において、支えているのは教育である。

(3) 米国の造園教育と大学教科課程の認定

現在、学部と大学院の2つのレベルがある。学部のレベルでは、BSLA (造園科学士) とBLA (造園学士) があるが、いずれも、一般のBS (科学士) やBA (芸術学士) とはその意図においてちがっている。

大学院のレベルではMLA (造園修士) がある。これも、MS (科学修士) やMA (芸術学修士) とは異なっている。そのちがいは、MSやMAが言わば博士前期課程であって、博士の学位に向って進行中の学位であるのに対して、造園修士は終結的な、これ以上ない学位である。

これらの学位のための教科課程は、その内容がきびしく審査された上で認定されることになる。その手続きは、およそ次のようなものである。

教科課程の認定を受けようとする場合、教育評議会 (Council on Education, COE と略す) によって設けられる一定の水準を満たさなければならない。そのカリキュラムの最小限の内容は、学部レベルにおいては、歴史、専門職の業務、デザイン、デザインの具体化、の4領域を掩うものであり、大学院レベルでは、これらに研究方法論と研究のデザインへの応用を加えた6領域を掩うものでなければならない。

教科課程の認定水準は、学部と大学院について、それぞれ、目標、標準、指針が詳細に規定されている。ひとつの例を示すと、指針のA、教員の経験と仕事、その1) 教員の経歴の項には、「巾広い学術的視点が存在するために、教員は他のいろいろな学校の卒業生で構成されることが勧められる」と書かれている。

COE委員はASLAの会長によって指名されることから、ASLAが教科課程の認定に大きな影響力をもつのは当然である。しかし、COEに認定権を授けているのはASLAではなく、学部認定評議会 (Council on Post-secondary Accreditation, COPA と略) と連邦教育省 (U. S. Dept. of Education) である。

また、COEとは別に、造園認定委員会 (Landscape Architectural Accreditation Board, LAAB) が設けられており、認定実務の監視と実施の任に当たっている。

教科課程の認定を受けようとする大学は、先ず、認定水準に関して、教科課程の自己評価報告書をあらかじめLAABに提出しておかねばならない。次に、LAABから認定委員が大学に派遣され調査が行われる。この調査は、提出された自己評価と現実とのくい違いに注目し

て、教員や学生との面接、学生の実習作品の検討、教育施設の視察などを通じて、徹底的に行われる。その結果、認定の可否が決められるというものである。

現在、学部レベルでは、大体似かよったカリキュラムが行われており、初心者教育については、何が、如何に教えられるべきであるかについての合意が成立しているように思われる。最良の学校というのではないが、いくつかのすぐれた学校はある。

大学院レベルでは、学校間の変化が大きい、この変化は、造園知識体系の巾を広げ、深さを増すための、より急速な進展を保証するものであるから、助長されるべきである。

COEによる教科課目の認定は、カリキュラムの内容や施設や教員が最小限度の水準を保つためのものであって、卒業生個人が学校で決められた以外の水準に達しているか、それを越えているかなどを示そうとするものではない。

これに対して、免許制度や登録制度は、造園業務を行う個人の資格を決定するものである。

(4) 造園家の免許制度と全国共通試験

造園家の免許制度は、各州の権限のなかにあり、連邦政府の責任ではない。各州の造園家は、1940年代頃から免許制の実現のために努力してきた結果、1960年には4つの州において、1980年には38州（現在は39州）において、免許制度が実施されることとなった。その結果、造園家として登録される最低限の資格を審査するための、全国共通試験問題が作られるようになった。これはASL Aによって、1961年に設立された造園家登録審査協議会（CLARB）によって作製されるが、実際に運用するのは各州である。ちなみに、1986年の試験の枠組みを見ると、客観テストと実技テストを合わせて15時間半に及ぶもので、ここに米国の造園知識体系のひとつの表現がみられる。

3. 印象記——日本の造園の現状（報告書から抜粋）

〔教育〕

私が会った造園の教員の多くは、基礎的研究に深くたずさわっているが、専門職のための訓練や実習において、かれらの研究が教育に結びつくことは殆どないように思われる。この基礎研究は造園の知識体系へは非常に大きな貢献となっているが、日本の専門職の問題には答えていないように思われる。

日本の造園の大学教員は同じ大学の卒業生で固められていて、かれらは専門職の経験を持つことが減多にない。これらの教員は、しばしば研究の仕事にしばられて、専門職的デザインを行うことが許されていない。その結果、教えられる課目は、実践的というより理論的と

なり、学生は卒業した後で、造園の技能を発達させねばならなくなる。

一言しておかねばならないのは、日本と米国のあいだには、専門職教育への道筋に大きな相違があるということ。これを私は認識しているということである。このちがいは文化的でもあり構造的でもあるから、二つの制度の比較は、興味があるとはいえ、どちらかの制度にどのようにして変化がもたらされるかについて、または変化への試みがなされるべきかどうかということについてさえ、手がかりを与えることは殆どない。

われわれの学問的方法や学術的運営システムに内在する相違、たぶんやむをえない相違を認識しながらも、私は日本の造園教育に関する気がかりな点のいくつかに言及するのは無意味ではないと感じるのである。

a. 学校はしばしば、たぶん常に、デザインの分野で学生を教育するための空間と施設を欠いている。設計演習の空間を欠いているのは明白であり、この問題についてのドラマティックな証拠である。

b. それぞれのクラスの学生数が少ないことは、デザイン教育の基本である知的興奮を保証するのに必要な、批判的集団の発展を初めから不可能にしている。

c. 教員の研究の過度の強調とかれらがコンサルティングの機会を追求することができないと感じていることは、民間の仕事や多くの行政機関に就職する学生にとって根本的に必要な、技術的かつ応用的なデザイン教育の道をとざすことになる。

d. 日本の農村は、学生が訪れて研究するであろうところのデザイン資源に富んでいる。しかし、私が訪れた大学のキャンパスは、日本で見たなかで最も貧しくデザインされ維持管理された環境であった。アメリカの水準からしても、これらのキャンパスは、美学的なスラムである。日本の将来の知的、政治的、専門的指導者となるべき学生が、デザインや維持管理や民衆に対する配慮において評価できないような環境で教育されていることは大へん心配である。これらのキャンパスは、民衆に対する、また、環境美学に対する配慮の全体的な欠落を反映している。これらは日本の視覚的および環境的な衰退地区を代表しているのである。

〔造園業務〕

多くの点で、日本の民間や政府の造園業務は、北米やヨーロッパで現在進行中の造園業務を反映している。しかしながら、日本の民間業務では、大きな事務所（たとえば15人以上の専門職のいる事務所）はすくなくないように思えるし、いろいろな専門職を集めた事務所も比較的すくなくないように思われる。このことは、日本の造園家が非常に大きなスケールの公共および民間の開発や風景計画の企画のなかで主導権を握る機会から締め出されること

を示唆するのではない。土地や環境の質が文化に対してきわめて強く影響する国、日本において、この事務所の形態を是正する問題は一考に値する。

他方、専門職として、設計施工業務が一般に受け入れられていることは、小さいスケールで密度濃くデザインされる環境の設計や管理においては、造園家が主要な役割を演じつづけるであろうことを保証している。このような日本の造園家の強さは、正当に保存され、拡充されるべきである。

民間と政府の仕事のあいだには、強い分離があるようにみえる。この二つの業務形態の間での職業の移動は、きわめてまれな例外でしかない。これは不幸なことであって、なぜなら、そういう分離がなければ、ふたつの業務形態のあいだに優れた交配種ができるかもしれないからである。

〔専門職〕

私はここ数年にわたり北米地域の専門職業と造園業について研究してきた。この研究に基づいて、米国において現在成り立っている造園は専門職の標準に合致しており、5つの性格をもつことを明らかにした。(前出の講演参照)

日本で成り立っている造園については、いろいろ話を聞いて努力をしてみたが、それが西欧で定義されるような専門職の標準にどのように合致し、5つの性格にあてはまるかについての、すっきりとした見方を組み立てることはできなかった。

「知識の体系」については、明らかに、日本は他の多くの国よりも幅広い理論的知識をもっている。それは、日本以外の世界中で生まれた知識を網羅しているし、日本の造園についての豊富な知識体系をも含んでいる。そして、この知識は大学レベルにおける教科課程として、初心者に伝達されている。

「倫理綱領」については、造園に従事する人びとが、どの程度まで明確に定義され、規律に基づいた綱領を持っているか明らかにすることはできなかった。仕事や取引や教育に影響を与えている厳格な文化的「ルール」が

あるのは確かだが、造園に特定される倫理がどの程度まで存在しているかは明らかではない。

日本の造園の「社会的地位」は、相当におおやけの認識を享受している。これは、大部分、日本における庭のデザインの長い伝統や、すぐれた庭の作者が歴史的に大きな名声や社会的認知を受けてきたことに依るのである。また、収入の面でも日本は米国に匹敵するようになっている。例えば、設計施工に従事する人たちは大へん繁盛しているように思われる。ひとつの明らかなちがいは大学の仕事である。米国では、造園の教員には造園業の平均以上の給料が支払われる。日本ではそうでないように思われる。もうひとつのはっきりした対比は、この職業における女性の地位である。日本の造園における女性に対する明白な差別は、人間的資源の重大な浪費を結果している。

「社会の支持」に関しては、日本では僅かに公務員の分類に造園職が示される程度である。造園家のための、法的保護、資格を与える方法、独占的事業形態などは、すべて専門職の条件を確かめる標準であるが、日本には無い。加えるに、米国においては、造園教育に特有の教科内容に対して、認定を行うという形での、社会的に支持された管理が行われている。日本では、造園の職業と大学の教科課程の間には、殆ど関係がないように思われる。日米の高等教育制度間に文化的、構造的相違はあるとしても、米国で行われている自発的な認定の過程を検討してみるのには、日本にとってもも有益であろう。

最後に、「専門職の下位文化」を一瞥つと、日本造園学会を始めとして、造園の営業者の要求や利益を扱う組織は5つほどある。しかし日本に欠けているのは、造園の一般的要求や利益を扱うところの、単一の広い基盤を持った組織である。造園家の知識や技能に対して、日本は際立った必要性をかかえており、さらに、もっと高度にきたえられた人材や明瞭に打ち立てられた社会からの支持に対する強い要求が日本の造園のなかにあるにもかかわらず、どうして、大きな傘をひろげたような統一組織が生まれてこないのか私には不思議である。

Summary : Not only acquiring the systematic observation and it's background but also training the self-sustenance as a professional man in the social and practical field is regarded as of major importance in U. S. landscape professional education.

Therefore, the division of landscape study, the diversity of landscape curriculum and the establishment of landscape license are in close connection with the practical field.

On that point, Japanese landscape architecture is inclined to theoretical point. It is due to the difference of natural and social environment around the landscape architecture.